

26 白銀堂由来（イ）

薩摩の侍がね、薩摩の廃藩までの、三百七十年間のね、薩摩の支配下に沖繩はあつたわけですから。薩摩の王様の支配下にあつたわけだから、その時には薩摩からいろいろこの、商売をする商人の方々が次々に貿易をして沖繩に来るんですよ。

来た時に、マンクーという方がね、たいへん正直者だったらしいです。そして、その鹿児島の方からね、お金を一応借りてあつたらしいですね。商人から。借りてあつて、この薩摩の商人の方はね、一応お金を貸して。その時にはまあ帰つたでしょうな。

そして、二回来た時も三回来た時も、実際はたいへん貧乏でね、お金を返す力がなかったと。いつ来ても、催促されてもね、お返しするお金がなかったと。もう癪に障るから、日本刀を抜いてね、切ろうとしたと。その時にね、この借りた人がよ、

「ちよつと待つて下さいよ。手が出たらね、意地を引

きなさい。意地が出たら手を引きなさい」と、こういつた言葉を使つてね、いたらね、結局その方も短気を押えてね、

「ああ、そうか。じゃあもう一回来る時には必ずこのお金を返済してくれよ」

「必ずね、次来る時までには間違いなく返済いたしますよ」と言つてね、その場をしのいだらしいんだな。

そしたら、この薩摩の侍はね、その時薩摩に帰つてね。自分の妻がね、自分のおふくろがね、蚊帳の中で自分の母が男の姿に変装して、寝ていたらいいんですな。これを、間男を作っているんだろなということ、刀を抜いて切り殺そうとしたんだけれども、あの沖繩のね、琉球のあの海人の、お金借りた人が、『意地が出たら手を引きなさいよ。手が出たら意地を引きなさいよ』と言う言葉を思い出してよく考えてみたらね、やつぱしこの、自分の妻はね、おふくろがちゃんとしていたと。あのお金を貸した方がね、そういうことを言わなかったら、私は自分の母も自分の妻もね、切つて捨ててあつたんだろな。これを、自分の短気を押えてね、たいへん有難いと、恩を感じたと、い

うことでね、再度沖繩に来てね。

したら、その時にはきちつとね、海もね、大漁で、どどん漁がうまくいつてね、お金をようやく作つたんだと。

「このお金は長い間、たいへん延び延びになってしまつてね、ご迷惑掛けましたが、どうぞ取つて下さいよ」と言つてね、差しあげたらしいんだな。そのお金をね、銀貨を。そしたら薩摩の商人はね、

「いやいや、これはもういいよ。君の言葉のお蔭でね、私は自分の妻子をね、親を殺すことがね、止めることができた。たいへん恩のある言葉でね、私は有難かつたんだ。だからね、そのお金を取らないよ」

「ああ、取つて下さい」

「取つて下さい」と言つてね、押し問答したらしいんだな。

「いや、そんならこのお金をここに埋めよう」と。そして、埋めてね。ここが白銀堂としてお宮が建つたんだというふうには伝説はなっているんですがね。

しかし、もともとここにはニライカナイという海の、

遠い見えないところからのね、目に見えない神様がね、御豊饒をね、大漁ね、海の幸も山の幸もちゃんと与えて下さるんだという願いをね、したところが拝所であつて、拝所のところと同じ場所にこういったのがあつたんだと。だから、拝むところは、ここも拝むんだけど、ここも拝むところがある。二か所もあるんですよ。

字系満 野原由宗

類話

字系満

金城修治、上原徳助、田場天龍、

上原加州男、金城安彦、上原セキ

上原亀吉、稲嶺盛亀、長嶺トミ

字武富

大城トミ、長嶺陽元

字北波平

賀数長安、大城清助、大城正太郎

当銘キヨ

字賀数

大城政秀

字照屋

上江洲由豊

字豊原

国吉マツ

字与座

伊敷清保

字真栄平

比嘉スエ

字新垣

宜野座仁一郎

字名城

新垣栄蔵、伊敷義光、伊敷亀順

字小波蔵

新垣武登

字小波蔵

奥間ヨシ、伊敷カミ、伊敷ヤス

字系洲

伊敷ヨシ

字南波平

神里カマ

字摩文仁

伊集スエ、山城カナ

字大度

伊集盛亀、伊保三郎

字米須

玉城トシ

字米須

山城昭治